

実践報告 梶山女学園大学教育学部 公開セミナー

保育実践ワークショップ 2008

植松 峻

Takashi Uematsu

磯部 錦司

Kinji Isobe

伸びやかで澄んだ声をつくる方法

——生理的に開放された声を求めて——

植松 峻

この報告は平成 20 年 7 月 19 日(土)午後 1 時 30 分から 2 時 20 分までの 50 分間、約 30 余名の受講生に実施したワークショップの実施要項及びその概要をまとめたものである。

実施要項

1 声について

3 母音と子音につて

2 声楽上の声区について

① 人の声はいかにしてできるのか

① イタリア語、ドイツ語、日本語の

② 共鳴腔、共鳴、共鳴点について

本質的な違い

③ 音声学、声楽上の声の区分につ

② アルシス、テイジスについて

いて

1. 声について

・人は声を出すことに何の考えもなく自然に出るものだと思っていますが、どのようにして音としての声になるのかと考えたとき、多くの人が答えに窮します。〈ではここで声について考えてみたいと思います。〉

声は大きく三つの要素で成り立ちます。それは第一に肺にためられた空気（息）と第二にその空気が通過するときに振動する声帯（二枚リードのような）と第三にその振動を音声に変える共鳴腔の三つの連動作用によるものなのです。

第一の空気は呼、吸、によって肺に入り滞留し、出たりします。第二の声帯は甲状軟骨、披裂軟骨、輪状軟骨によって構成されております。第三の共鳴腔はヴァイオリンの胴体に相当するような口腔、鼻腔、頭腔、胸腔があります。

また共鳴は前述のそれぞれの腔で振動として送られてきたものを、音に変えられた状態をさします。そして振動の焦点が共鳴腔のどの部分（たとえば歯、歯茎、上顎の口腔蓋）に当たる、その部分、場所、点を共鳴点と総称します。

2. 声楽上の声区について

音声学、声楽上、声はまず高い音の頭声区、中間音の中声区そして低い音の胸声区の3つに区分されます。そして頭声、中声、胸声区比率分布の違いが音色の違い、ある種の個性音となります。たとえばソプラノ、テノールの人は概して頭声がバリトン、メゾソプラノの人は中声が、バス、アルトの人は胸声の音が多いと考えられています。（ソプラノ、テノールの人も他の中声、胸声の声はもちろん含まれています。）

また我が国の声に関する考え方は実声（表の声）と裏声（虚の声）の二つ考え方が一般的になっております。

3. 子音と母音について

日本語と外国語としてのイタリア語ドイツ語との大きな違いは、子音と母音を切り離して発音できるイタリア語ドイツ語、それに対して日本語は音節語であるため子音と母音を切り離すことができません。母音ののびやかなイタリア語の語頭を飾る子音の役目、語頭と語尾にリズムと変化と躍動感を作り出すドイツ語における子音の役目、それに対して母音中心で母音の中に埋没しがちな子音を有する日本語。この違いが言葉で表出する歌、唄、歌曲、オペラのアリアを演奏した時に音楽、音響内容、表現に大きな違いとなってきます。

また言葉が連続しつながり、それがメロディーになったときイタリア、ドイツ語音楽では、基本的な人間の足の動作で、その足を上げることを一アルシス、その足を上から下ろすことを一テージスと言い、音楽のメロディー上にもアルシス系、テイジス系の循環運動を考え、その循環運動の連続を上下する躍動感に変換していきます。日本のこの種のものには前述のアルシス、テイジスの考え方はありません。

結論 伸びやかで澄んだ声をつくるには

我が国の唄う、（歌う）文化の中では喉音、一般的には喉音〔ノド声〕が使われることが多いです。その例が演歌、民謡、わらべ唄、浪曲、義太夫にその典型を見ることができます。特に浪曲などでは声を一度や二度潰して、出なくしてからがいい声になるという考え方があり、生理的に開放された美しい、澄んだ伸びのある声に関する考え方と対極にあると考えられます。その生理的に解放された美しい、澄んだ伸びのある声をつくるには、上顎の硬口蓋と軟口蓋の交わる場所（共鳴点）に、声帯を通過

し振動した空気の流れが当たり集められ、共鳴音—ヒビキとなるようにすることです。そして歌う時の姿勢は「あくび」の状態を保つことです。それは肺に溜められた空気が、二枚リードのような機能を有した所を通過し、振動音（流れ）となり上顎の共鳴点にコントロールされて当たり、そして音声となる。そんなことをイメージし、訓練すればきっと目指す音を自分のものとする可以考虑しております。

実際に声を出して歌ってみましょう

用意され歌われた作品は次の2曲です

- | | | |
|---|-------------|---------|
| A | 歌え野に出て（カノン） | 小林純一 作詞 |
| | | ドイツ民謡 |
| B | 野バラ（二重唱） | ゲーテ 作詞 |
| | | ウェルナー作曲 |

【歌う時の注意点】

- ； 共鳴点、母音、子音に注意しましょう
- ； 音楽のアルシス、テイジスを注意してみましょう

まとめとして

まず身体は花の匂いを嗅ぐように、また欠伸をするように歌う準備をしましょう。子音 C、K を発音するところを、音を最初に発する共鳴点としましょう。そしてその共鳴点周辺を大事なポイントとしてまず歌ってみてください。

絵に見る子どもの心

磯部 錦司

この報告は、平成 20 年 7 月 19 日（土）午後 2 時 30 分から 50 分間、約 30 余名の受講生に実施したワークショップの概要をまとめたものである。

1. プロローグ ——かけがえのない「生きる営み」——

○作品：「ちょうちょう」（チェコ・リデツェ）

「あげはちょう」（3 歳児）

ナチスの収容所の中でガス室へ送られる以前に描かれた子どもの絵と、今日の子どもの絵の中に共にある「かけがえのない色と線」に着目し、その子が生きる痕跡としてみることでできる色と形について、そのかけがえのなさを知る。

2. 描くことの始まり

○作品：「チンパンジーの描画」と「1 歳 6 ヶ月の描画」

チンパンジーの絵画と人間の 1 歳以後の絵画を比較し、絵画に見られる人間としての歩み出しについて見る。

- ・ LC 運動と身体的機能との関わり
- ・ はじめにイメージありきではない
- ・ ものとの関わりから生まれる「感じてあらわす」本能的作用

○演習：「スクリブルからイメージが生まれる体験」

LC 運動からやがてイメージが生まれ表現となっていく過程を体験する。

3. 子どもが絵を描く意味

○作品：「丸が閉じるとき」（2 歳児）

丸が閉じる意味づけ期について理解を深め、言葉とイメージがつながるところにある子どもの表現について知る。

○演習：「手足が出てくるころ」

頭足人が描かれるころの外界への感じ方に触れながらその表現を知る。

- ・ 環境との一体化
- ・ 「感じて表わす」ことによる見方、感じ方、考え方の広がり
- ・ 視覚的思考の過程
- ・ 想像力を培う過程
- ・ コミュニケーションとしての行為

4. 子どもと大人のリアリティーの違い

○作品「開眼手術によって視覚を獲得した人の絵」(Mさん)

視覚中心主義の大人な見方と子どもの感覚との違いについて知る。開眼手術によって視覚を獲得した方の事例からその内容を説明する。

○作品：「自転車」(5歳児)

自転車の事例をもとに、大人がイメージする視覚的なイメージと、子どもがイメージする総体的な感覚との違いについて鑑賞する。

- ・視覚優先の世界と感覚の統合としての世界

5. その子なりの表現をどう読み取るか

○作品：「かぜさんなの」(4歳児)「お花畑の風」(4歳児)「園庭の思い出」(5歳児)

風との一体感を表した作品、突き刺さる冬の瞬時の風を表した作品、四季の総体の風を表した作品の風が描かれている3つの作品をとおし、それぞれの感じ方に基づく表現内容の違いと、その子たちが表した表現方法の異なりについて鑑賞し、その子なりの表現のよさを見つけることの大切さにふれる。

- ・その子の営みの中に潜むその子の表現

6. 自明の発達過程の問い直し

○作品：「見つめる自分」「公園で遊んだ」(小学2年生)

指導によって方法的に写実的に描かれた作品と、自ら描いた図式的な同じ子が同じ時期に描いた2つの作品を比較し、理不尽な発達過程が子どもの表現をゆがめることを知る。

○作品：「海の魚釣り」(4歳児)

余白の表現について実験された作品をとおし、大人の指導が歪める子どもの空間表現の不具合について知る。

○作品：「楽しかったよ」(5歳児)

手足が既に体から描けるのに頭足人で描かれている作品理解をとおし、その子の必然の中の表現と直線的でない発達段階について鑑賞する。

○作品：「うちゅう」(4歳児)「いのちのイメージ」(中学3年生)

同じ主題を同じ形態で表し4歳児と中学生の絵を比較し、断片的な形態で発達過程を語ることができないことを見る。

- ・教科書の発達過程からの脱却
- ・表現と表出の捉え
- ・その子どもの今の時代の発達過程
- ・発達過程は直線的ではない

7. 子どもの絵を読み取る視点と方法

○演習：「デキゴトを色と形で表す」

一つのデキゴトを思い浮かべ、その時の感情を思い浮かべながら色と形で表現する。
その内容の鑑賞をとおり、色、形、ストロークに表れる心の状態や心情を見る。

○作品：「長良川で遊んだ絵」（5歳児）

生活と物語が重なる表現を鑑賞し、そこに表れる色と形から、その心的内容や、想像の広がりについて知る。

○作品：「昨日の絵と今日の絵」（5歳児）

お花畑で遊んだ同じ主題の同じ子どもが描いた昨日の作品と今日の作品を比較し、その内容の違いについて見つけ、日々変化する子ども心情や表現構造の違いについて理解する。また生活と空想の中にいる子どもの世界についてふれる。

○作品：「やぎの子どもが生まれた」

生活とのつながりの中で子どもの願いは色と形になって表れてくるところを見る。

- ・色と形とストロークに表れる子どもの心
- ・生活とのつながりの中で読む子どもの心
- ・伝えたいことがある。伝えたい人がいる

8. エピローグ ——絵は子どもの心を覗く眼鏡である——

絵に子どもの生活や心は表れる。子どもに寄り添い、子どもの心を読み取り、子どもの心に共感してあげたい。絵からそれができるのは、いつもそばにいる先生やお母さんである。

今回のワークショップが、日々の保育に少しでも寄与できればと願う。

■参考文献

1. 磯辺錦司『子どもが絵を描くとき』一藝社、2006年
2. 磯辺錦司『自然・子ども・アート』フレーベル館社、2007年